

# 埼玉育ちのグローバル人

## いきなりトンガ

### 第3回 「どんなつながり」

元 JICA 海外協力隊 2018 年度 1 次隊  
トンガ王国・コミュニティ開発  
伊藤 有未さん



埼玉県マスコット  
「コバトン」



はじめに 2022 年 1 月 15 日に発生しましたフンガ・トンガフンガ・ハアパイの海底火山噴火および津波被害について、1 日でも早く日常生活を取り戻すことができるよう心より願っております。

今回の海底火山噴火で、一気に世界的に有名となったトンガ王国。本エッセイの最後は、日本との共通点やつながりについて、ご紹介いたします。

#### トンガと日本の共通点は？

「**島国**」トンガと日本の第一の共通点です。同じ環太平洋造山帯に位置し、今回の噴火を含め、自然災害に見舞われるリスクの高いエリアとなります。私の赴任期間中にも小規模ではありますが、何度か地震を経験しました。

「**国旗**」トンガの国旗、ご存知ですか。  全体が赤ベースで、左上に白の長方形。 出典:外務省 その中に赤の十字架が描かれています。使用色は、日本同様に紅白のみ。誰もが描けるシンプルなデザインも日本国旗との共通点と言えるでしょう。

「**王室と皇室**」トンガは太平洋島嶼国の中でも唯一の王国です。2015 年には皇太子（現・天皇陛下）ご夫妻がトンガ国王戴冠式に参列され、2019 年にはトンガ国王夫妻が来日され、即位の礼に参列しておられます。皇室親交も深い親日国家。国家外交で良好な関係を築いているからこそ、私たち JICA 協力隊を温かく受け入れ、各産業分野においても信頼関係を構築できていると感じます。

「**グループ意識**」個々の意見をはっきり主張する国とそうでない国、日本はグループ属性意識を強く持つ国民性のため、一般的には後者と言えるでしょう。「全体の調和をとるも、後で陰口を言うしまう」日本でもよくある光景かと思いますが、トンガでも同様の場面に遭遇することがありました。どうやら、トンガの人たちも後者のようです。

#### トンガで感じる日本って？

「**日本車**」空港から出て、まず驚くのが車。個人的な感覚では、8 割強が日本の中古車です。「左へ曲がります、ご注意ください」こんな車の自動音声もそのまま。日本で使用された塗装が残る車や保管場所標章や所有者が自由に貼ったであろうステッカーがそのまま残っている車も多く見かけます。稀ですが、「車が動かない、説明書を読んでほしい」「このカーナビの設定はどうなっているんだ」との問い合わせを受けたこともありました。



街中で実際に使用されているバス

「日本語教育」トンガでは中等学校の選択教科の1つに日本語があり、年に1度在トンガ日本国大使館主催による日本語スピーチコンテストも開催されます。街を歩いていても「こんにちは」と時折声をかけられることや日本語を履修している生徒から、日本語の質問を受けることもありました。日本へのラグビー留学を望む生徒にとっても大切な教科、履修生徒数は少なくともトンガでの日本語教育の需要は途切れないでしょう。(余談ですが、これを機に母国語を聞かれても正確に指導できない自分が恥ずかしく情けなくなり、帰国後に日本語教師養成講座420時間課程を修了。)



放課後にそろばんの特訓を受ける児童

「珠算」トンガの教育事情として、日本語教育と合わせて知っておきたいのが、トゥポウ4世によって導入されたそろばん教育です。算数教育の一環として、小学3年から5年生の必修単元。日本から寄与されたそろばんを使って、学習します。各島での地方大会で選抜された児童は、全国大会への切符を勝ち取ります。任地エウア島での練習風景や大会の様子を見る機会がありました。「日本人よりもそろばんを理解し、向き合っているのではないか」と思うくらい、彼らの真剣な眼差しには心打たれるものがあつたのを覚えています。

### 日本で見かけるトンガって？

次に、日本で知られているトンガにどのようなことがあるのかを考えてみます。第一に有名なのは、「ラグビー」でしょうか。2019年日本で開催されたラグビーワールドカップにも出場し、試合前

のシピタウ(士気を高める儀式)も印象深いです。ラグビーはトンガの国民的スポーツ。土曜日のグラウンドに足を運べば、地域対抗戦の練習試合を見ることができます。もう1つが、「かぼちゃ」です。輸出用で、トンガの人たちが食べる機会は少ないようですが、日本のスーパーに行けば稀に「トンガ産」との表記を見ることができます。

### これからのトンガとのつながり

トンガで得た経験は一生モノ。心豊かな人たちに出会うことができ、その人たちに支えられた感謝の気持ちは、帰国後2年経った今でも薄れることはありません。現在は、「お世話になったトンガの人たちに会いたい」との想いを募らせながら、コロナ禍で自由に渡航できない状況が続く、「今私が日本でできることは何なのか」を考え、自らの人生設計を立てるようにしています。具体的には、国際保健医療協力や災害ボランティア知識を増やし、その他「開発におけるサステナビリティは何か」を追究できるような環境に身を置いてみたいなど、協力隊での活動を経験した今、学生時代では考えられなかった「学びに対する意識」が食欲になっています。また、トンガの家族や友人とSNSで連絡を取り、トンガ語の維持にも努めています。よって、私のトンガへの愛情は冷めることなく、これからもずっと続いていくことでしょう。



いつも私を支えてくれた隣に住む姉弟

最後に。当リレーエッセイを通じて、トンガが少しでも身近な国になっていただければ幸いです。ご拝読いただき、有難うございました。'Ofa atu!